

ネット社会という船に乗って 62

「一人暮らしがしたい」にも適齢期がある？

文 佐渡島庸平

text by Yohei Sadoshima

中学2年生の長男が、家を出て一人暮らしをした
いと言いだした。学校を辞めて、学費分を一人暮ら
しに充てたいという。それを聞いた時に、僕は即座
に否定した。親から干渉されたくないだけで、逃避
的な意思決定だと。前向きな意思決定ではなく、よ
り墮落していきただけだと僕は感じた。けれども数日
経って、僕自身が矛盾しているように感じた。子育
ては子どもが自立するように促す行為である。大
学生か社会人になったら一人暮らしをすることを
求める。それが4、5年早くやってきただけである。

現実的に可能かどうかは別として、一人暮らしをし
たいという欲望を息子が持ったことは、成長の証と
して喜ばしいことではないか。先日、長男が僕と身
長が同じになった時は「このあとは、僕を超えてい
くんだな」と、喜ばしいこととして写真を撮ったの
に、なぜ同じように反応できなかったのだろうか。

すると、今度は数十万を貸してほしいと訴えてき
た。中学生でもできるビジネスを考えたらしい。電
化製品はリアルな店舗だと在庫を処分するために、
ネットでの相場よりも安く売っているものが日々出
回る。それを足繁く通って見つけ、ネットで売る。
活動量と売り上げが比例するから、努力すれば確実に

に利益が出る。それで一人暮らしをするための資金
を稼ぐという考えらしい。僕が中学生の時には絶対
に思いつかなかった発想だ。YouTubeやS
NSからの情報によって、学校の同級生からは得る
ことがない知識を手に入れることができるようにな
った。

子どもには、自分が予想できる範囲の中でベスト
な状態になることをついつい期待してしまう。予想
外の行動をしてきた時、それを瞬間的に否定してし
まう。子どもは、親の言うことを聞くべきという思
想が、僕に染み込んでしまっているのだろう。

子育てというのは、自分の器の大きさに気づかせ
てくれることが多い。否定するのはやめようと思っ
たものの、長男とどう話し合っていけばいいのか、
まだよくわからないままだ。子どもとの話し合い
は、親の言うことを理解させる方法にばかり意識が
行ってしまう。子どもの視点からは、何が見えてい
るのか、傾聴がなかなかできない。傾聴して子ども
の視点を理解できてこそ、子育ての楽しさだと頭で
はわかっている。

Profile

株式会社コルク 代表取締役

2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形
の先にあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。

